

## 病院訪問教育に求められる教師像に関する一考察 —病院訪問教育のDVDを視聴した大学生の意見の分析から—

A study on the teacher image required for “hospital visit” education  
—Through the analysis of opinions of university students who watched  
a DVD of “hospital visit” education—

姉崎 弘\*  
ANEZAKI Hiroshi

### 要 旨

教育の一形態として、特別支援学校の教師が病気やけがで入院している児童生徒の病院を訪問してベッドサイドで授業を行う、いわゆる病院訪問教育がある。この教育は、通常教育と特別支援教育の架け橋に相当するものである。これまで病院訪問教育における指導について論じた著書や論文はいくつか見られるが、病院訪問教育を担当する教師に求められる教師像についてはあまり論じられていない。この教師像について考察することは、通常教育の教師像にも示唆するものがあると考えられる。そこで本稿では、病院訪問教育を担当する教師像について検討を行った。方法として、大学生に病院訪問教育の実際に関するドラマ（60分のDVD）を視聴させ、学生たちからの意見の分析と先行文献を基に、検討を行った。その結果、病院訪問教育を担当する教師には、たとえ病院訪問教育の経験がほとんどなく始めはわからないことが多くても、①先輩や同僚教師から積極的に学ぶと共に、教師としての向上心を持ち続けられる教師、②児童や保護者からも謙虚に学ぶ姿勢を持ち、常に教師としての使命感を持つ教師、③児童への深い愛情に根差して、児童の心に寄り添いその不安な気持ちを低減させ、自尊感情を高めて自信や希望を抱けるように精神的な支えになることのできる教師、④絶えず教師としてのあり方を内省し自らに問い直すことのできる教師、⑤入院中の児童や保護者に柔軟に対応することのできる教師、がその教師像として求められていると考えられた。

### Abstract

As a form of education, there is a teacher of a special needs school who visits a hospital of students that are hospitalized with illness or injury to perform a lesson in bedside manner. Before the visit, books and papers were discussed regarding hospital visit training. Although teachers are seen, not much is discussed about the image the teacher in charge of the hospital visits projects. In this paper, I examined the image projected by the teacher in charge of the hospital visits. Viewing actual footage of hospital visit training of university students, and on the basis of their opinion and the preceding literature. The result was, the teacher in charge of hospital visits, was asked. ① teachers should continue to have aspirations as well as actively learn from experienced teachers and colleagues, ② The teacher should be humble and learn from children and parents, and always have a sense of mission, ③ The teacher should be rooted in a deep love for children, snuggle in the minds of children, it is possible to reduce the anxiety, by increasing self-esteem, confidence and hope, as spiritual support, ④ The teacher should question himself constantly, ⑤ The teacher should be flexible with children and parents in the hospital.

キーワード：病院訪問教育、教師像、「病弱者の心理・生理・病理」の授業、大学生

Keywords: hospital visit education, teacher image, class of "Psycho-physiological and pathological of invalid person", university student

### I. はじめに

文部科学省(2015)<sup>1)</sup>が全国調査を実施した「長期入院児童生徒に対する教育支援に関する実態調査の結果(概要)」(調査期間：2013年4月1日～2014年3月31日)によれば、病気やけがによる入院により転学等をした児童生徒は延べ約5,000人で、小・中学校からの主な転学先は、県内の特別支援学校であった(約71%)。在籍児童生徒が転学等

\* 大和大学教育学部教育学科

平成27年9月30日受理

をした小・中学校は約 3,600 校で全小・中学校の約 1 割に当たり、小・中学校では約 7 割が復籍していた。また病気やけがにより長期入院（年間延べ 30 課業日以上）した児童生徒は延べ約 6,300 人で、在籍児童生徒が長期入院した小・中学校は約 2,400 校で全小・中学校の 1 割弱に当たる。

また、上記の実態調査の特別支援学校（小・中学部）に関する結果<sup>2)</sup>によれば、長期入院した児童生徒に対して、教員が病院等に訪問し、ベッドサイド等を借りて学習指導（いわゆる、病院訪問教育）を実施していたのは、全 397 校中 122 校で約 31%の特別支援学校で、対象児童生徒は全 2,078 人中 909 人で約 44%であった。また病院訪問教育の平均実施回数は、多い順に、①週 5 日（35 校、28%）、②週 3 日（28 校、23%）、③週 1 日（18 校、15%）などで、1 日あたりの平均実施時間は、多い順に、① 135 分以上（32 校、26%）、② 134 分～105 分（29 校、24%）、③ 74 分～45 分（25 校、20%）、などであった。さらに病院訪問教育における学習指導以外の取組みとして、多い順に、①実態把握をする（401 校、32%）、②心理的な不安などの相談支援を行う（294 校、23%）、③退院後に円滑に学校生活に戻れるよう、他の児童生徒に病気の理解啓発等を行う（259 校、21%）、④入院中も学級の児童生徒と交流を行うなどして、戻ってきやすい環境配慮に努める（241 校、19%）などであった。横田（2009）<sup>3)</sup>によれば、児童生徒の病気は 550 種を超え、その種類ごとに適切な配慮が求められているといわれる。また 2009 年度の全国病類調査集計結果によれば、第 1 位は「心身症など行動障害」で、第 2 位は「筋ジスなど神経系疾患」、第 3 位は「重度・重複など」であった<sup>4)</sup>。

病弱児、特に病院に入院中の児童生徒に対する学校教育、いわゆる病院訪問教育のあり方については、先行文献が数多く見られる<sup>5) 6) 7)</sup>。また病院訪問教育の指導に関する著書・論文もいくつか見られる<sup>4) 8) 9) 10) 11) 12)</sup>。特に、病院訪問教育は、児童が、病気やけがの治療などのため入院を余儀なくされ、家庭やそれまで通っていた学校を離れて、孤独な中で病気や寂しい・不安な思いと日々闘っている。こうした児童たちには、退院後に原籍校の小・中学校へ戻った時に学習についていけるように、学力保障のための教科学習と併せて、特に心理的な支援が不可欠であるとされている。担当教師には、教科学習の指導力と共に、個々の児童の病気を理解し、児童の良き相談相手になることで、児童との信頼関係を築き、楽しさや生きがいを感じさせる授業を行うなど、精神的・心理的な支援に基盤を置いたきめ細かな指導が求められている。

しかしながら、これまで病院訪問教育のあり方に関する先行文献は見られるが、この教育を担当する教師のあり方、いわゆる教師像についてはあまり論じられていないように思われる。この教育を担当する教師像について考察することは、病院訪問教育に限らず、通常教育を担当する教師のあり方を検討する上でも示唆されるものが多いのではないかと考えられる。それは、病院訪問教育の児童生徒たちの多くは、元々小・中学校に在籍していて、途中で病気やけがを発症して入院を余儀なくされて、一時的に特別支援学校に転学することになったからである。そして退院したら、また元の原籍校に戻って学校生活を送ることになる。その意味で、入院している病弱児の教育は、特別支援学校による病院訪問教育担当教師と原籍校である小・中学校の担当教師の両者が関わる特別な教育に位置づけられる、という点にこの教育の特色がある。

### [研究の目的]

そこで、本稿では、病院訪問教育を担当する教師に求められる教師像に迫るため、病院訪問教育の実際に関するテレビドラマの DVD を学生に視聴させ、それを参考にして病院訪問教育を担当する教師にどのような教師像が求められるのかについて、学生一人一人に考えさせ、さらに学生によるグループワークでも相互に意見交換を行い、そこで出された学生の意見と、先行文献を基に、検討を加えることを目的とした。

## II. 方法

### 1. 対象授業および対象学生

平成 27 年度大和大学教育学部で開設された前期の選択科目の授業「病弱者の心理・生理・病理」（2 単位、全 15 回のオムニバス形式）の筆者担当分（6 月実施の 4 回）。大和大学教育学部学生（1 回生）80 名を対象とした。

### 2. 授業計画

筆者担当分の 4 回の授業の内、第 1 回目と第 2 回目の 2 回の授業を充てた。表 1 に、この 2 回分の授業計画の概要を示した。

<p>1 回目：①訪問教育の制度，病院訪問教育の概要の説明。学習教材（DVD）の内容を簡単に紹介。（25分）                  ②学習教材（DVD）の視聴の前に，次回の授業までに，各自「病院訪問教育に求められる教師像」について自分なりに考え，所定の用紙に記入してくる課題（自由記述）を出す。（5分）                  ③病院訪問教育の実際に関する学習教材（DVD）の視聴。（60分）</p>
<p>2 回目：学生のグループワーク。4名1組になり，病院訪問教育に求められる教師像についてグループごとに意見交換する。（40分）                  グループごとの発表（20グループ）。グループの代表者1名が前に出て，グループで出た意見を発表する（2分以内）。（40分）                  授業者による総括と補足説明および学生が記入した課題の用紙の回収。（10分）</p>

### 3. 分析対象

学生80名中，課題の用紙を提出した73名分について分析を行った（回収率は88%）。学生が書いてきた「病院訪問教育に求められる教師像」に関する意見（自由記述）の中から，教師像に該当する記述を抽出し，内容のまとまりごとに集計しグラフ化を行った（複数回答可）。

### 4. 授業の学習教材

2007年8月18日からNHK総合テレビで放映された全3回の連続ドラマ。1回60分のドラマで，病院訪問教育の実際を再現した土曜ドラマ「勉強したい！」<sup>13)</sup>全3回の第1回「出前教師，橋口順平です！」のDVDを授業の学習教材として学生に視聴させた。主人公の教師は30代前半の男性で，病院に入院中の小学生の児童2人の担任となり，指導に当たることになる。そのあらすじを以下の①及び②に示す。

#### あらすじ①「初めての病院訪問教育，児童や親との出会い，そして指導の挫折を経験する」

① ドラマの主人公は，名古屋の高校教師，橋口順平（32歳）。高校陸上部監督で，かつて陸上短距離の元オリンピック候補で運動エリート。県内トップクラスの陸上部を育成。「やれば出来る！」がモットー。だが，ある日突然，校長から養護学校への異動を命ぜられる。始め戸惑いがあったが，異動を受け入れる。愛知県豊崎市（仮名）にある養護学校。同僚の九鬼先生から「病訪」は，病院訪問教育，略して病訪であると教えられる。私たちは，病気で入院している子どもの病院を訪問して授業を行う，いわゆる出前教師である。要望があれば，県内の病院，どこにでも行く。

**（橋口の戸惑いと新しい教育への挑戦）**

② 小2男子（7歳），小4女子（10歳）の二人の担任になる，一週間に2時間の授業が3回，通常は週に17時間以上かけて教えるのに，たったの6時間でやらなければならない。これまで高校で生物を教えていたが，小2と小4の全教科を教えなければならない。子どもたちが退院後，元の学校の授業についていけるように，しっかり授業の準備をしなければならないと思う。

**（橋口は担当の子どもたちを知る，授業の準備に精を出す）**

③ 車を運転して，名古屋市の病院へ訪問教育に出かける。

交通事故による下半身不随でベッドに横になっている小2男子（洋二君）に，挨拶し手を伸ばして握手を求めると，「届かない。ぼく，もう動けないんだから。届かないよ」と言われる。橋口は「一緒にがんばろう」と言うが，本児は無視して横を向いてしまう。母親がそばで見ていて，不安そうにしている。ベッドサイドで教科書で授業を始めようとするが，本児は下を向いたまま，教師の話しかけに一切応じようとはしない。話をしてくれない。子どもに口をきいてもらえずへこみ，ショックを受けて病院を後にする。帰りがけ，本児の両親にばったり出会う。父親の告白，「わが子をあのような体にしたのは，私なんです。私の運転する車で，あの子は事故に遭いました。あの子はもう歩けないんです。」父親は自分を責める。父親は，「あの子をくれぐれもよろしくお願いします。訪問の授業を受けることで，あの子が新しい希望を見出してくれたらと思います。」橋口は「はい」と言う。

**（橋口は指導の困難な壁に出くわす，洋二の暗い気持ち，洋二の父親の自分自身を責める心情を知る）**

④ 同じ日，次は小4女子のいる蒲都市へ出かける。

未来（みく）ちゃん。急性リンパ性白血病。初回に大きな声で元気に，橋口に「辻本未来です。よろしく申し上げます」と元気に挨拶をする。「未来。先生にプレゼントがあるの。」ビックリ箱をプレゼントする。中からオモチャ

が急に飛び出すもの。笑い。

別の日に、再度、未来ちゃんの病室へ。

橋口先生が来るって、昨日から楽しみにしていた本児。しかし今朝になって急に具合が悪くなった。ベッドで熟睡している未来ちゃん。看護師「遠くまで来ていただいて、済みません」と話す。

**(もう一人担当する子ども、未来から元気をもらう、橋口は自分の病氣と闘っている子どもの姿を見る)**

⑤ 夜、居酒屋で、同僚の女教師は「入院している子は、めったに友達に会えないので、私たちに会えるのをすごく楽しみにしているのよ。」「たった週3日の授業でも、本当に大切なよ。」と言う。橋口「教師が逃げずに向かい合っていけば、わかりあえます。やればできる。ぼくは人生をかけて子どもたちと向かい合っていきます。」九鬼先生「お前は何もわかってないよ」

**(橋口は先輩教師からのアドバイスで指導の要所を覚えてもらう、自分の指導への過信)**

⑥ 養護学校の職員室で、橋口「病気の子どもを教えるって、本当に大変ですね。一人は具合が悪くて授業ができないし、もう一人はぼくと口も聞いてくれないんですよ」九鬼「来るか。俺の授業、見てみるか。」橋口は一緒についていく。かばんの中から、子どもが新しいゲームを見つけ、「やろう。やろうと言う」九鬼「これは自信作なんだぞ。」橋口「ゲームなんて、やっていいんですか。ぼくらの役目は、あの子たちが学校に帰った後、授業についていけるようにしてやることでしょ。」九鬼「確かにそれもある。しかしもっと大事なことは他にある。」「それはゲームだ。」橋口「あの子は、いつになったら口を聞いてくれるのかな」

**(先輩教師が橋口に自分の授業を見に来いと話す、先輩の授業から学ぶ)**

⑦ 洋二君の病室の側まで来ると、母親が本児を叱責していた。「もうすぐ、先生が来るの。しっかりしなさい」「なんとか言いなさい」と。洋二君「あの先生、嫌い」と言う。橋口は母親と話す。「今日は帰って、出直します。」母親「こんなことを言うのは失礼ですけど、担当の先生を替わっていただくことはできないでしょうか。橋口先生が悪いということではなく、他の学校と違って、子どもと先生が1対1だし、相性とか重要になってくるのかな。先生、これ以上来ていただいても・・・」

**(洋二の母親の悩み・苦しみ、橋口は母親から担当の教師を交代してほしいと話される)**

ただし、あらすじ①と②において、( )内に要旨のポイントを記した。

あらすじ②「先輩教師や児童自身から自分の指導の拙さを教えられる、児童に寄り添い児童と一緒に成長する教師の姿」

⑧ 学校で、橋口は、主任にお詫びをする。九鬼先生「ダメだよ。子どもに一生懸命とか、頑張ろうと言ったんだろ。」橋口「言いましたよ」女教師「確かに、あまり良くないかもしれないわね。入院してる子たちは、病氣やケガに立ち向かっているだけで、もう十分頑張っているのよ。逆に「頑張れ」と言われるほど、追いつめられた気分になったりして」九鬼「お前、陸上やってたんだろ。その足、ケガをして一生走れなくなったら、どう思う。」「あいつら、そういうギリギリのところで戦っているんだ。お前は何にもわかっていないんだよ。」

**(橋口から主任教師へのお詫び、同僚教師から橋口への貴重な教え)**

⑨ 橋口は高校の時の教え子と会う。高校の時の自分について、教え子に率直に話をしてもらう。

「みんな好きだったよ。先生のお陰で俺たちが強くなれたのは事実だし。「ただ、先生に俺たちの本当の実力が見えているかどうか、わかんないな、と思うことはあった。先生はすごい人。陸上でオリンピック候補にまで選ばれて。やればできる男じゃん。でも俺たち、ほとんどが普通の人間だもん。先生のオーダーに応えるのは結構無理をした。まあ、実際それで部活を辞めたやつもいたしさ」

夜、妻に「俺、教師、辞めようかな。陸上の選手だった頃は、走り込めば、走り込んだだけタイムが上がった。努力したらただけ報酬されたんだ。だから先生になってからも同じように、子どもたちに「頑張ろう」とか、「一生懸命」とか言い続けた。でもそれって傷つけてたんだ。やろうと思ってもできない子どもたち。俺、何もわかってなかった。教師続けて迷惑かけるより・・・」妻「順ちゃんは、限界超えるまで走ったの。本当の本当に、先生を辞めたいの」と。

(橋口は高校時代の教え子から当時の自分の姿について客観的な意見をもらう、自分自身を振り返り、何がいかなかったのかを反省する)

⑩ 未来ちゃんのベッドサイドでの授業。

橋口「先生、もう一人教えている男の子がいてさ、先生、その子のことをすごく傷つけちゃって。その子のことをどうすればいいのかって」と未来ちゃんに話す。未来「その子、きっと寂しいんだと思う。入院すると、まわりは知らない人ばかりだし、最初はお見舞いに来てくれた友達もどんどん来なくなって、ずっと一人なんだ。誰か側にいてほしくて。そんなことを言えなくて、反対に意地悪をしてしまって。未来もそういうこと、あったもん。もう慣れたけど。」「でもね、先生。この前、未来が調子が悪くて授業が受けられなかった時も、来てくれたんでしょ。後で聞いて、未来、すごく嬉しかった。忘れられちゃうのが、一番寂しいから。だから、その子も先生が来てくれることを、本当は喜んでいと思う。先生、このウサギのぬいぐるみ、さっきの子にあげて。いいの、あげたいの」  
(橋口は未来に自分の抱えている悩みを吐露し、その子の気持ちを聞く、橋口は未来からぬいぐるみを渡してほしいと頼まれる)

⑪ 洋二君のベッドサイドで。教科書で算数の勉強をするが、一切顔を合わせない。そこで、さっきのぬいぐるみを取り出して腹話術で話を聞かせる。ベッドサイドで、ウサギを持って話しかける。「洋二君、ごめん。橋口先生、洋二君の気持ちも考えないで、「頑張り」なんて、ダメなやつだよな。でもあいつ、まだ新米なんだ。へまやっても、許してやってくれないか。その代わりに、今度へましたら、俺がこうして叱ってやるから。」うさぎで、ポカッと自分の頭を叩く。「あっ痛て」何度も頭を叩く。本児の表情が和む。ニコニコし出す。橋口「ぼく、野球が好きなんだ。洋二君も野球が好きなんだろ。」洋二「好きだよ。」橋口「そう言えば、橋口先生、野球ゲームを持ってほしいぜ。今度、ぼくと一緒に野球ゲームやらないか」と誘う。洋二「やってあげてもいいけど」初めて口をきいた。橋口、笑顔で喜ぶ。

(橋口はぬいぐるみを使って腹話術をする、洋二にお詫びし自分の頭を何度も叩く、洋二の興味を基に野球ゲームをする約束をする)

⑫ 次回の授業で。洋二君は、ぬいぐるみのたっ君と楽しそうに野球ゲームをしている。それを見て、母親は嬉し泣き。「あの子が事故に遭ってから、あんなに楽しそうにしているの、初めてなんです。この前は失礼なことを言って本当に済みませんでした。」洋二「ぼく、車いす、練習しようかな。」と教師の顔を見て話す。車いすでお母さんやお父さんの所に行きたいと。橋口「そうか。お父さん、きっと喜ぶぞ。」

(洋二と楽しく野球ゲームをする、母親の喜びと橋口へのお詫び、洋二の前向きな生き方や発言を引き出す)

⑬ 九鬼「うまくいったみたいだな。」橋口「偶然というか、ぼく、何もできなかったんです。生徒と向かい合うことすら、できなくて。ただ野球ゲームをやったり、ぬいぐるみで遊んだり。そんなことしか・・・」九鬼「それでいいんだよ。俺は、教師にできることはほとんどない、と思っている。俺たちが子どもたちの考え方や生き方を変えようというのは、所詮無理な考えだ。でもな、あいつらが、自力で歩き出すまで、ただ寄り添ってあげることならできる。」橋口「寄り添う？」九鬼「それが出前教師にとって、一番大事なことだと思っている。まあ、教師には何もできない。それがわかったのなら、お前もちょっとは見込みがあるかもな。」

(橋口の内省報告、先輩教師による指導の大事な点についてのアドバイス)

⑭ 未来ちゃんの病院で。橋口「これ、この前の男の子からのお礼」と言って、未来ちゃんに、ぬいぐるみの絵を渡す。未来「喜んでくれた？」橋口「うん。未来のくれたぬいぐるみのお陰で、その子と仲良くなれた。」未来「すごい！」橋口「俺は未来の先生だけど、未来は俺の先生だな。」未来「私が。先生の先生？変なの。」二人で笑う。  
(橋口はぬいぐるみのお陰で洋二と仲良くなれたこと、未来に、教師は子どもに教えられることから子どもは教師の先生でもあると話す)

### Ⅲ. 結果

#### 1. 学生からみた「病院訪問教育担当教師に求められる教師像」について

図1に、「病院訪問教育担当教師に求められる教師像」について、学生の意見(内容)のまとまりごとの集計結果を示した。

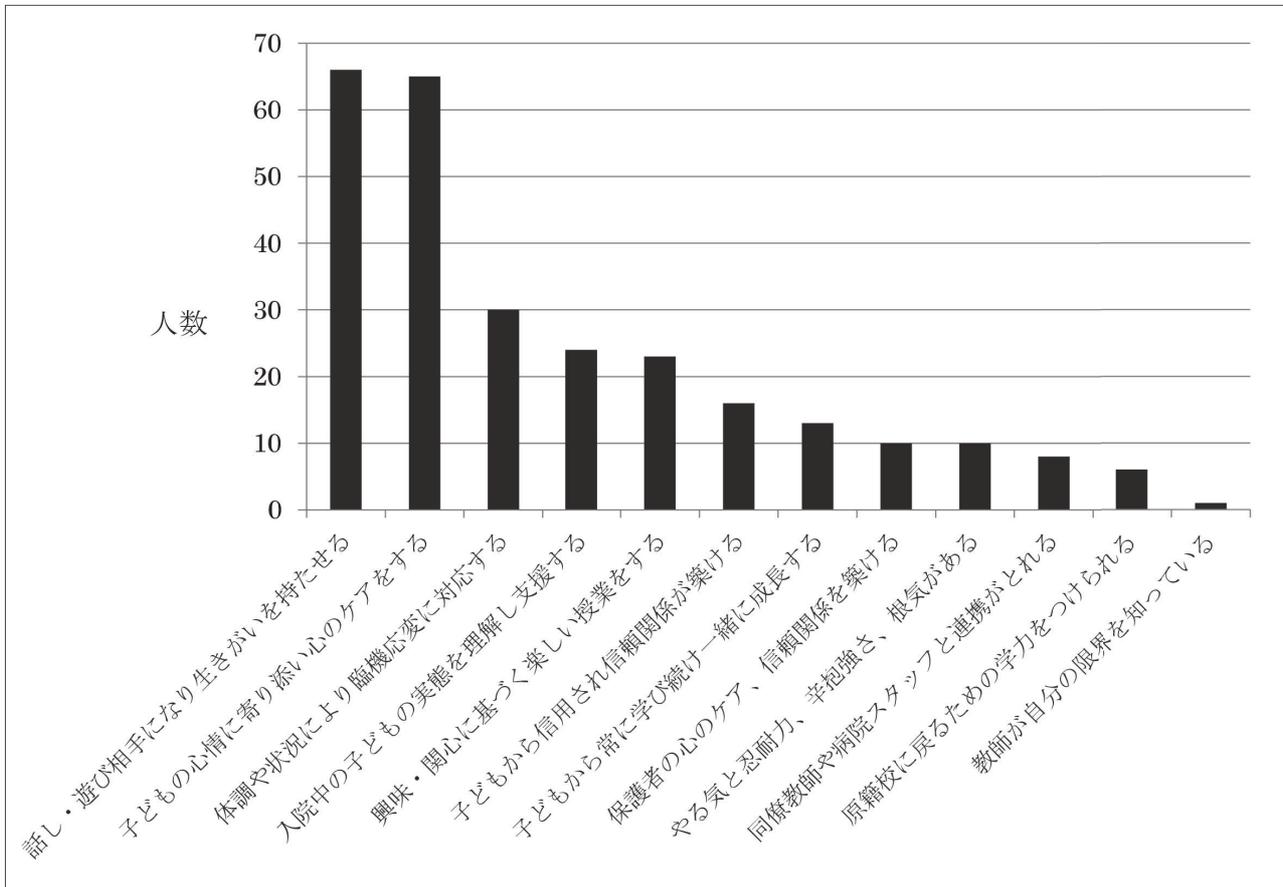


図1 病院訪問教育担当教師に求められる教師像 (学生の意見の分析から)

図1より、「病院訪問教育担当教師に求められる教師像」として、順位の高い順に、①子どもの話し相手や遊び相手になり生きがいを持たせられる教師(66人)、②子どもの病気や不安、孤独、苦しみなどの心情に寄り添い心のケアのできる教師(65人)、③子どもの体調や状況に応じて臨機応変に対応できる教師(30人)、④入院中の子どもの実態を理解して支援できる教師(24人)、⑤子どもの興味や関心に基づき楽しい授業のできる教師(23人)、⑥子どもから信用され信頼関係を築ける教師(16人)、⑦子どもから常に学び続け子どもと一緒に成長していく教師(13人)、⑧保護者の心のケアを行い、保護者との信頼関係を築ける教師(10人)、⑨この教育にやる気や忍耐力・辛抱強さ・根気のある教師(10人)、⑩同僚教師や医師・看護師などの病院スタッフとの連携がとれる教師(8人)、⑪原籍校に戻るための教科の学力を付けられる教師(6人)、⑫自分自身のやれる限界を知っている教師(1人)、であった。

上記を整理すると、次のようになる。「①子どもの話し相手・遊び相手になる」「②子どもの心情に寄り添う」「④子どもの実態を理解する」といった、「子どもの実態を理解した上での心理的支援・心のケアのできる教師」が全体の約57%(155人)を占めた。また「③子どもの体調や状況を見て臨機応変に対応する」「⑤子どもの興味・関心に基づき楽しい授業をする」といった「子どもの体調に配慮して臨機応変に対応し興味・関心に基づいた楽しい授業のできる教師」が約19%(53人)、⑦⑨⑩⑫から「常に学び続け成長していく姿勢や資質を持つ教師」が約12%(32人)、さらに⑥⑧から「子どもや保護者との信頼関係を築ける教師」が約10%(26人)、その他として「原籍校に戻るための学力保障ができる教師」が約2%(6人)となった。

## IV. 考 察

### 1. 学生からみた「病院訪問教育担当教師に求められる教師像」について

「Ⅱ.方法」の「4.授業の学習教材」の「あらすじ①②」には、突然高校教師から病院訪問教育を担当することになった30代前半の男子教師が、担当する児童たちや保護者と出会い、指導の挫折を経験しつつ、先輩教師の教えや他の児童に支えられながら、また自らを内省し、児童からも教えられ教師として成長していく姿が描かれている。ここでは、小2の洋二が心を閉ざし、授業で教科の指導が通用しないことから、児童の実態や心情を理解し、児童の興味のあるぬいぐるみや好きな野球ゲームを取り入れて楽しい授業になるように創意工夫を行っている。

図1の結果より、学生はこのドラマの視聴を通じて、病院訪問教育を担当する教師に求められる教師像として、原籍校に戻るための学力保障のできる教師を低く評価していたのに対して、他方、子どもの実態を理解した上での心理的支援や心のケアのできる教師を高く評価していた。また子どもの体調に配慮して臨機応変に対応し興味・関心に基づいた楽しい授業のできる教師、常に学び続け成長していく姿勢や資質を持つ教師、さらに子どもや保護者との信頼関係が築ける教師、を順に評価していた。このドラマは、教師自身による学びや資質向上の基本姿勢を基礎として、担当児童の実態から、どちらかと言えば、教科の学習指導というよりも、児童の心理的な支援や興味・関心に基づいた楽しい授業づくりを優先し、児童や先輩および同僚教師から常に学びながら一緒に成長し、児童や保護者との信頼関係をつくっていった授業であると理解される。このドラマでは、原籍校の小学校の教師や同じ学級の児童による訪問の場面は見られなかったが、実際にはそれが行われていたと考えられる。そして対象児童は、日々けがや孤独と闘いながら、主に看護師や母親に支えられながら生活をしてきたと推測される。

小島(2007)<sup>8)</sup>によれば、入院中の児童の心理について、「小学部低学年は治療等の苦痛や家庭から離れることへの不安を大きな脅威と受け止める傾向にある」こと、さらに「不安を低減し、希望を抱けるような支援を展開していくことが望まれる」ことが指摘されている。このことから、学習指導は学習の空白を埋めるために必要な指導である<sup>4)</sup>が、それに先立って、緊急を要する指導内容として、特に対象児童の心理面に関する配慮や支援を最優先する必要があると理解される。今回学習教材として取り上げたドラマにおいても、学生は「児童の心理的な支援・心のケアのできる教師」を高く評価していたことは首肯される。

### 2. 教育学の立場からみた「あるべき教師像」の知見から

中央教育審議会(2005)の「新しい時代の義務教育を創造する(答申)」<sup>14)</sup>に、次のような「あるべき教師像」が明示されている。

#### ①「教職に対する強い情熱」

教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感などである。また、教師は、変化の著しい社会や学校、子どもたちに適切に対応するため、常に学び続ける向上心を持つことも大切である。

#### ②「教育の専門家としての確かな力量」

「教師は授業で勝負する」と言われるように、この力量が「教育のプロ」のプロたる所以である。この力量は、具体的には、子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級づくりの力、学習指導・授業作りの力、教材解釈の力などからなるものと言える。

#### ③「総合的な人間力」

教師には、子どもたちの人格形成に関わる者として、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質を備えていることが求められる。また、教師は、他の教師や事務職員、栄養職員など、教職員全体と同僚として協力していくことが大切である。

また上記の答申では、教員の資質能力の向上を図るために、教員の養成・採用・研修・評価の各段階における改革を総合的に推進する必要があることを提言している。そして学校教育の成否を左右するのは、教員の資質能力であることから、教員が自ら自主的・専門的・相互的な「教育研修活動」を通じて、「不断にその資質向上に努める」ことが必要とされている<sup>15)</sup>。教育職員養成審議会(1987)の「教員の資質能力の向上方策等について(答申)」<sup>16)</sup>の「はじめに」の中に、「教員としての資質能力」として、①教育者としての使命感、②人間の成長・発達についての深い理解、③幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、④教科等に関する専門的知識、⑤広く豊かな教養、⑥これらを基盤とした実践的指導力、の6点が示されている。今回のドラマの構成では、教師に求められる資質能力として、特に、①教育者としての使命感、②人間の成長・発達についての深い理解、③幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、さらに⑥実践的指導力の4つが深く関わっていたと理解される。

ドラマの主人公の橋口は、元々高校の教師で陸上部の監督をしていた。そして突然養護学校（現特別支援学校、以下特別支援学校と記す）への異動を命ぜられ、病院訪問教育を担当することになった。一般的に、病院訪問教育を担当するためには、大学の教員養成課程で特別支援学校教諭の免許状を取得し、特別支援学校教員の採用枠で受験をし、採用後は特別支援学校に勤務し、十数年の勤務経験を経た後、特別支援学校の中堅またはベテランの教師が訪問教育（病院訪問教育）を担当するのが通例である。しかしドラマの教師は、高校採用の教師であり、途中から特別支援学校に異動を余儀なくされている。したがって、教員養成課程で学んだ後、特別支援学校教員の採用と研修を経ずして、いきなり病院訪問教育の担当教師になっている。特別支援学校と高校は、同じく県立学校ということで、このような人事交流が行われている。

教員が特別支援学校に勤務する場合には、教育職員免許法附則第16項の規定「当分の間は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の教諭の免許状を有する者は、特別支援学校の教員免許状の学校種に相当する各部の教員となることできません。」により、特別支援学校の教員免許状を所有していなくても勤務できることになっている<sup>17)</sup>。これは、戦後まもない時期に、当該免許状の取得者が少なかった時代のやむを得ない措置であったが、今日もこの規定は生きている。したがって、高校から特別支援学校への教員の配置換えは合法であり、小学生を担当したことから小学校の教員免許状を取得していたと考えられる。また特別支援学校の教員が特別支援学校の教員免許状を取得していない場合には、認定講習等を受講して早期に特別支援学校の免許状を取得することが奨励されている。

特別支援教育の基礎知識をほとんど持たない教師にとっては、まず新しい特別支援学校で自分が担当することになった目の前の児童自身からその実態や教育のニーズを学び取ること、そしてまわりの先輩教師や同僚教師から積極的に学ぶことで、このギャップを埋めるしかないのである。つまり自己努力による以外にはないのである。橋口が最初の授業の挫折を乗り越えていったのは、彼自身の持つ教育への使命感と子どもへの愛情、子どもをよりよく理解するように常に学び続ける向上心をもっていったこと、そして何よりも本人が努力したことによるものと考えられる。「新しい時代の義務教育を創造する（答申）」<sup>14)</sup>（2005）に照らして言えば、主人公の橋口は、主に①教職に対する強い情熱と、③総合的な人間力を持っていた、と推測される。これさえしっかり持っていれば、②教育の専門家としての確かな力量は、勤務経験を重ねる内に徐々に獲得していくことが可能であると考えられる。

### 3. 病院訪問教育担当教師に求められる教師像について

鎌田（2012）<sup>18)</sup>は「教師に必要な資質」の中で、「自分磨きを徹底的に行い、自分の『あり方』を磨こうとする強い意志、姿勢」を重視し、そして教育の難問に答える時に問われるもの、必要なものは、「やり方」ではなく、その人の人としての「あり方」である、と述べている。病院訪問教育は、病気やけがのある子どもに対する担当教師としての「あり方」が常に問われる教育である。今回のドラマでは、入院中の病気やけがのある小学生を対象にした授業のあり方が問題とされている。金森（2005）<sup>19)</sup>は、小学校教師の仕事の中で「教師の最も大切な仕事は、子どもの心に寄りそい、子どもから学ぶこと」だと指摘している。また卒業していく児童自身の言葉から「先生の先生は子どもたちでもある」と述べている。木原（2012）<sup>20)</sup>も、教師の成長のためには「学び」の重要性を指摘している。ドラマの橋口は、心を閉ざした洋二の心を開くため、彼の心を理解するように努め、彼の心に寄り添いながら、先輩教師や他の児童からも学ぶ姿勢を失わなかった。そして他の児童の語った言葉を通して「子どもは先生の先生である」との認識を深めていった。病院訪問教育では、教師が成長していくために、時には児童を自分の先生として、謙虚に児童自身からも学ぶ姿勢が大切であることを教えてくれている。

文部科学省(2015a)の調査結果が、在籍児童生徒が長期入院した小・中学校は全小・中学校の1割弱にのぼり、約6,300人の児童生徒が長期入院している。この数値は決して少なくはないと思われる。入院中の児童の心理特性として、治療等の苦痛や家庭から離れることへの不安を大きな脅威と受け止める傾向にあること、そのため、不安を低減し、希望を抱けるような支援を展開していくことが望まれること<sup>7)</sup>が指摘されている。したがって、入院児童の場合には、その児童の病気やけが、その日の体調、学習進度などを時間をかけて実態把握を行った<sup>10)</sup>上で、教科の学習指導に先立って、このような児童の気持ちに何よりも寄り添い<sup>6) 12)</sup>、闘病に対する精神的支え<sup>9) 10)</sup>となり、その精神的安定を図るための精神面や心理面の配慮や支援<sup>10)</sup>が何よりも最優先される。

特に、入院が長期化すると、学習時間が週6時間（週2回、1回2時間の授業）になり全体的に少ないことから、児童に学習空白の時間が徐々に増えるため、学習面で自信を失いやすく、その結果、自尊感情が低くなることがある。この児童が、今後長い人生を生きていく上で、自ら自信を深め、自尊感情を高める支援は何よりも重要である<sup>21)</sup>。つまり、こうした児童に対して「あなたは友達から必要とされている」「あなたは友達から認められている」「自分もやればできるんだ」ということを十分に理解させる指導や支援が何よりも大切である。ドラマの病院訪問教育では、授業

が週3日、1回2時間程度しか実施できない（これは全国の平均レベルに相当する）ことから、児童の興味や関心に基づいた指導内容をできるだけ精選し、保護者や病院関係者、学校関係者、同僚教師ともよく相談して連携を図る<sup>6) 7)</sup> 必要があり、退院後の原籍校への復学を前提にした指導を行う必要<sup>9)</sup>がある。

病院訪問教育を担当する教師には、たとえ病院訪問教育の経験がほとんどなく始めはわからないことが多くても、①先輩教師や同僚教師から積極的に学ぶと共に、教師としての向上心を持ち続けられる教師、②常に教師としての使命感を持ち、児童や保護者からも謙虚に学ぶ姿勢を持つ教師、③児童への深い愛情に根差して、児童の心に寄り添いその不安な気持ちを低減させ、自尊感情を高めて自信や希望を抱けるように精神的な支えになることのできる教師、④絶えず教師としてのあり方を内省し自らに問い直すことのできる教師、⑤入院中の児童や保護者に柔軟に対応することのできる教師、が求められていると考えられる。このような教師像が、特に病院に入院している児童の教育を担当する教師に求められる姿であると考えられる。また病院訪問教育では、学生が高く評価をしていた、③の「児童への深い愛情に根差して、児童の心に寄り添いその不安な気持ちを低減させ、自尊感情を高めて自信や希望を抱けるように精神的な支えになることのできる教師」が、特に「望まれる教師像」として重要である。

また二宮（2011）<sup>22)</sup>は、「(前略)特別支援教育を『子どもの学びと育ちの支援教育』として捉えなおし、通常学級の標準装備にしていくことが求められている」と指摘している。宮本（2009）<sup>23)</sup>も、特別支援教育を「さまざまな児童生徒一人一人の学びと人間としての成長を支援するための教育」と理解している。今日小・中学校の通常学級に、LDやADHDなどの発達障害児やその周辺にいる児童生徒が平均して2名前後在籍している現状がある<sup>21)</sup>。こうした発達障害等の児童生徒の指導を担当する教師のあり方を考える上でも、病院訪問教育に求められる教師像が同様に必要とされているのではないかと考えられる。病院訪問教育は、対象児童が原籍校の通常教育と転学先の特別支援学校の両者に関係することから、通常教育と特別支援教育の両者の教育の架け橋になる教育であると考えられる。このことから、この教育の取組みの重要性と課題は、今後通常教育においても十分に認識される必要があると考えられることができる。

## VI. 今後の課題

今回は、病院訪問教育の担当経験のない比較的若い教師の実践を取り上げて検討を行った。今後は、病院訪問教育の担当経験のあるベテラン教師の実践も取り上げることで、今回の結果と比較考察を行いながら、さらに教師像に迫っていききたい。

第二に、今回は小学生の事例を取り上げた。今後中学生の事例についても取り上げ、そこに小学生とは異なるどのような問題があるのかを整理しながら、さらに検討を深めていきたい。

第三に、今回は原籍校の担任教師や学級の仲間の児童たちがまったく登場しなかった。しかし実際には、原籍校の教師や児童たちによる支援等も少なからず行われているのが現状である。今後、病院訪問教育担当教師と原籍校の教師や児童生徒との連携による支援の視点も取り上げて、さらに検討していきたい。

## 引用・参考文献および参考サイト

- 1) 文部科学省（2015a）長期入院児童生徒に対する教育支援に関する実態調査の結果（概要）  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/\\_icsFiles/afieldfile/2015/08/14/1358301\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/_icsFiles/afieldfile/2015/08/14/1358301_01.pdf)（2015年9月20日参照）
- 2) 文部科学省（2015b）長期入院児童生徒に対する教育支援に関する実態調査  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/\\_icsFiles/afieldfile/2015/05/26/1358251\\_02\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/_icsFiles/afieldfile/2015/05/26/1358251_02_1.pdf)（2015年9月20日参照）
- 3) 横田雅史他（2009）特別支援教育における病弱児の教育と小中学校支援Ⅱ日本特殊教育学会第46回大会シンポジウム報告自主シンポジウム11. 特殊教育学研究46（5）, 341-342.
- 4) 姉崎 弘（2011）(1) 病弱の特性. 特別支援教育―一人一人のニーズに応じた教育の実現をめざして（第3版）―. 大学教育出版. 51-54.
- 5) 宮本信也・土橋圭子編（2013）病弱・虚弱児の医療・療育・教育（改訂2版）. 金芳堂. 194-255.
- 6) 全国特別支援学校病弱教育校長会編著（2014）特別支援学校の学習指導要領を踏まえた 病気の子どものガイドブック―病弱教育における指導の進め方―. ジアース教育新社. 18-31.
- 7) 中井 滋（2001）学校・病院との連携の基本的事項. 育療, 23, 38-42.
- 8) 小島道生（2007）病弱児の心理学的研究に関する一考察. 長崎大学教育学部紀要（教育科学）, 71, 39-47.

- 9) 福士貴子・松井一郎・谷村雅子・小林 登 (1991) 小児がん長期生存患者と治療期間中の教育措置問題. 小児がん,28 (1),97-99.
- 10) 福士貴子 (1991) 病院訪問教員のソーシャルワーク機能—小児がん患児の訪問教育から—. 社会福祉,32,101-111.
- 11) 松田 直 (1999) 施設・病院訪問教育と子どもの生活の充実を図る視点. 発達障害研究,20 (4),287-295.
- 12) 山本純士 (2006) 病院で生活する子どもにかかわる人たち (3) 病院訪問教育の教員 愛知の病院訪問教育. 発達,27,76-80.
- 13) 土曜ドラマ「勉強したい!」  
<http://www.6.nhk.or.jp/drama/pastprog/outline.html?i=benkyo> (2015年9月20日参照)
- 14) 中央教育審議会 (2005) 「新しい時代の義務教育を創造する (答申)」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05102601/all.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05102601/all.pdf)
- 15) 佐久間裕之編著 (2013) 第3章 教員の資質能力. 玉川大学教職専門シリーズ 教職概論. 玉川大学出版部,59-84.
- 16) 教育職員養成審議会 (1987) 「教員の資質能力の向上方策等について (答申)」  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/01/23/1315356\\_001\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/01/23/1315356_001_1.pdf)  
(2015年9月20日参照)
- 17) 文部科学省 (2014) 教員免許制度の概要
- 18) 鎌田首治朗 (2012) 第1章 教職をめざす 「教職とは?—エピソードからみえる教師・学校—」編む著. 教育出版,2-9.
- 19) 金森俊朗 (2005) 第1章教師の仕事 1 小学校. 日本教師教育学会編 講座 教師教育学 第1巻. 教師とは—教師の役割と専門性を深める—. 学文社,37-41.
- 20) 木原俊行 (2012) V 教員養成と教職 教職における教師の成長. 安彦忠彦他編著 やわらかアカデミズム・<わかる>シリーズ よくわかる教育学原論. ミネルヴァ書房,72-73.
- 21) 姉崎 弘 (2009) 保・幼・小・中・高校における発達障害のある子を支援する教育. ナカニシヤ出版,50,73-74.
- 22) 二宮信一・北海道教育大学附属釧路小学校 (2011) 1章 通常学級と特別支援教育. 明治図書,9-15.
- 23) 宮本信也他監修 (2009) 第9章教師像, 資質・能力と留意・配慮事項等 特別支援教育の基礎—確かな支援のできる教師・保育士になるために—. 東京書籍,303-305.